
ERROR

クロノワクレナイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ERROR

【Nコード】

N5659D

【作者名】

クロノワクレナイ

【あらすじ】

ハンバーガーショップの店長を務める主人公は元旦早々、部下の不祥事で店に呼ばれる。その晩、彼女である麻美と喧嘩をしていた彼は、ひどく苛立っていた。二人は懲りずに言い合いを続けるが、店を出たそのとき、麻美の表情にあったものとは……。

なんだろう。この苛立たしいしい気持ちは。もどかしいわけでもなく、歯がゆいわけでもなく、ただ単に、苛立たしい。この状況が凄く、怒りのボルテージを上げていく。

さっきから、けたたましく警報音が鳴っている。うるさい、耳が痛い。鈍痛だ。耳鳴りにも似た症状が出てきた。ずっと同じ音楽を聴いてるのと同じで、いい加減別の音を聴きたくなってくるものだ。残念なことに——本当に残念なことにそれが出来ない状態だから、余計いらいらも積もる。

「ビービービーうるっさいんだよ！」

ドカツ！

俺は、ドアを思いっきり蹴った。しかし強化ガラスはびくともしない。俺の脚が激しく痛んだというくらいだ。

「ねえ、そんなにいらいらしないでよ」

「うるせえ」

「警備の人を呼んでくればいいじゃない」

けれど呼ぶまでもなかった。腰に懐中電灯をぶら下げた間抜け面のおっさんがこちらに歩み寄ってきていたからだ。

「なーにやってんのよ。あんた確かハンバーガーショップの人だろ？」

俺は無然と肯く。「早く開けてくださいよ」

「カードは？　ちゃんと持ってるの？」

俺はIDカードを渡してみせた。

「いつもならこれで開くのには開かないんすよ。どうなってんすか」

「うーん。わからんねえ。普通開くはずなんだが」

「なんとかしてよ、おっちゃん」

「じゃあちよっくら電話してくるから、ここで待ってて。いいね？」
体を横に揺さぶりながら警備のおっさんは去っていき、俺たちは

ドアの前に座り込んだ。今日は間違いなく一年で最低最悪の日だろう。

俺は渋谷の丸の内ビルにあるハンバーガーショップの店長だった。バイトから成り上がったというまさに典型的なタイプの飲食店員。いま横にいる女はうちで三年バイトを続けたあとに俺とくっついた手越麻美。しかし毎度のことながら車の中で喧嘩をし、ここに着くまでお互いに一言も口を利かなかったというわけだ。

店を一日だけ後輩の社員に任したのが運の尽きだった。調理法を誤ってクリームが山と届いたという話。どうして正月からこんなことをしなくちゃならないのか。

「……煙草一本ちょうだい」

俺は黙って一本、麻美に煙草を渡した。

「火も」

俺はポケットからライターを取り出す。だが床に落ちてしまった。

「投げることはないでしょ」

「落ちちゃったんだよ」

フン、と顔をそむけ、煙草に火をともし。喧嘩の理由は大したことじゃない。ちよつとしたこじれをこいつが過去に結びつけることで火が増すのだ。俺は口を開きかけるが、いまは喧嘩をする気力もなかったので、黙って煙草に火を点けた。

「あのおっさんいつ来るんだよ」

「知らない」

「つかえねえおっさんだな、ったく」

麻美はきつと俺を睨んだ。

「なんだよ」

「そうやってすぐに人を馬鹿にして」

「別にいいだろ。おまえあいつの娘かよ」

「あのねえ、あの人だって私たちが来て迷惑してるんだよ？ そんなことくらいわかるでしょ」

いちいち癢にさわる女だ。年下のくせしやがって。

「それくらいわかってる。でもどうしておまえがそういうことを俺に言う権利があるんだ？」

「あなたより常識があるから」

「よく言うよ。バイトに色目つかってたくせに」

「ひどい。ひどすぎる。私がいつ誰に色目を使ったって言うの？」

「小島」

「小島くん？ 馬鹿みたい。いちいち妬かないでよ、みっともない」

「おまえなあ——」

とまさにそのとき、自動扉が開いて、背もたれを失った俺たちは悲鳴と共にコンクリートの床に手をついた。駐車場に例のおっさんと思われる人物のアナウンスが響き渡る。

『開いたかい？ 防災センターに行つて鍵を開けてもらいました』

俺たちは困惑を顔に浮かべながら、とにかく防犯カメラに向かつて手を挙げた。

『帰りもこつちに電話して開けてもらつて。エレベーターに番号が書いてあります』

俺たちは扉の内側に入り、エレベーターのボタンを押した。念のために防災センターとやらの番号を携帯電話に入力しておく。

「ほら、やつぱりいい人だった」

「あのおやじ？」

「わざわざ遠くまで行つてくれたんだよ。私たちのために。こんな時間に」

「それが仕事だろ」

俺がそう言うと、麻美は声と表情をがらりと変えた。

「あなたって本当に冷たい。そういうのが格好いいと勘違いしてるんだろうけど」

むっときたが、かろうじてこらえた。なにかを言い返すにはあまりにも疲れすぎている。こういうとき、女というのは疲れたりしな

いのだろうか。麻美に関しては、俺との喧嘩で引いたためしがない。お嬢様だからだろう。」

夜の丸の内ビルは昼間の賑やかな人手とはうってかわり、なにか陰謀じみた静けさに包み込まれている。時おりシャワシャワとスプリンクラーが動いたび、俺はつい暗闇の奥になにかの姿を探し求めてしまう。イルミネーションが深海魚のようにビルの闇に浮かび上がっている。俺は店の鍵を開け、上着を脱いで客席に放り投げた。

「さっさと片づけよう」

「私はなにをすればいいの？」

「座つてりゃあいいだろ」

「どれくらいかかるの？ その、なんだっけ、クレーム処理？」

俺は事務所の引き出しから書類を一枚取り、麻美の前に置いた。

「始末書。十分もあれば終わる」

それからデスクに置いたハンコを取り、ポンポンと押して名前と住所と店番号を書き記した。それに加え「自分は馬鹿で間抜けでどうしようもないカス野郎です」という旨の反省文。麻美はしんとと作業を見つめ、時おり驚かされたような表情で俺の顔つきを見た。

「……よし、これで終わり。帰るぞ。眠い」

どういうわけか、麻美はおとなしくなっていた。エレベーターの中でも一言も口を利かない。とはいえ俺の方としても話すのが面倒だったから、例のおっさんに言われたとおりに自動扉を開けてもらい、黙って車に乗り込んだ。

信号で車が停まったところで、麻美はようやく口を開いた。

「ねえ、さっきは言いすぎた。ごめん」

「なんだよ、いきなり」

「あのね、なんていうのかな……」

俺はハンドルから手を離れた。後ろから車は来ていないことを確認し、麻美の声に耳をかたむけた。

「なに？」

「さつき、あなたは冷たくて、そうすることを格好いいと思い込んでただけなんだって言ったけど……」

「言ったけど？」

「反省文、あったでしょ。あれを見て少しだけ考えが変わった」
「言いたいことがわからなかった。」

「どういう意味だよ？」

「あなたはプライドの塊だって思ってたの。自分を卑下したりすることは絶対ない人なんだなって。……でもそうじゃないみたいだったから」

「仕事だからだよ」

麻美は首を振った。目に意思を持って俺を見据える。

「それがプライドなんだなって、気づかされたから」

その夜はたしかに最低の一日だった。けれど最後に救われた。結局のところ、愛する人に少しは自分を理解されたわけだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5659d/>

ERROR

2010年10月8日15時08分発行